

四条河原夕涼しどうがはらゆふすゞみは六月七日より始り同十八日に終る。東西の青楼よりは川辺に床を設け、灯は星の如く、河原には床

几をつらねて流光に宴を催し。濃紫の帽子は河風に翩翻として、色よき美少年の月の明きにおもはゆくかざす扇のなまめきてみやびやかなれば、心もいとゞきそひてめかれせずそゞろなるに、妓婦の今を盛といろはへて、芙蓉も及ばざる粧ひ、蘭麝のこまやかに薰り、南へ行北へ行。淹茶の店に休ふては山吹の花香に酔を醒し、香煎かもがはには鴨川の流れを汲んで京の水の軽を賞し。かる口咄は晋の郭象にも勝れて懸河の水を注が如し、物真似は函谷関にもおとらぬかや。猿狂言犬のすまひ、曲馬曲枕、麒麟の繩渡は鞦韆の倂ちやるめらにして、哨呐ちやるめらの声かまびすく、心太の店には灌水■々と流て暑を避、硝子の音は珊々と飴して涼風をまねく。和漢の名鳥深山の猛獸もこゝに集て觀とし。貴賤群をなして川辺に遊宴するも、御みそぎがは菟川の例にして、小蠅なす神を退散し、牛頭ごづ天皇の蘇民将来に教給ふ夏はらへの遺風なるべし。「昔大内裏の時は群臣一同に朱雀門しゅじやくもんにあつまりてはらへをなせしなり、是をあらにこのはらへといふ。四季おほくは相生じて造化あるを、夏ばかり相生ぜずして秋にうつり、しかも火氣の金氣を尅するがゆゑに、その火氣をなだめんがためはらひをなすとかや」

泊船集

四条の川原すゞみとて、夕月夜のころより有明過る頃まで、川中に床をならべて、夜すがら酒のみものく

ひあそぶ。をんなは帯のむすびめいかめかしく、をとこは羽織ながう着なして、法師老人どもに交り、桶やかぢやの弟子子まで、ときめきてうたひのゝしる、さすがに都のけしきなるべし。

川風や薄かき着たる夕すゝみ

はせを